

	名古屋大学農学部 同窓会報	発行所	名古屋大学農学部同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	吉田正人・柴田貴広
		発行人	板谷精三
		印刷所	株式会社 クイックス

「農学部・生命農学研究科の近況」

名古屋大学農学部同窓会 名誉会長 服部重昭
(農学部長・大学院生命農学研究科長)

農学部同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。ご存知のように、平成21年8月に同窓会会員録が発行されました。これによりまして、農学部同窓会の会員数は現在およそ12000名であり、会員は北海道から沖縄県まで全都道府県におられ、社会の多方面で活躍しておられることが分かります。また、海外に在住しておられる方も300名を超えています。卒業生のグローバルな活動状況の一端をうかがい知ることができます。さらに多くの会員が海外で同窓会報「セコイア通信」を読まれる時代が来るような予感を覚えながら、「セコイア通信」は国内外の同窓会会員をつなぐ貴重な情報ネットワークであることを改めて認識した次第です。

さて、この1年間に農学部・生命農学研究科においていくつかの動きがありました。まず今年、法人化における第1期中期目標期間（平成16年度～21年度）の最終年度に当たるため、この期間を通しての農学部・生命農学研究科における活動や成果をまとめ、教育、研究に係る最終的な評価を受けることとなります。大学評価・学位授与機構による、平成16年度～平成19年度の4年間の評価は良好で、とくに研究水準は「期待される水準を上回る」という高い評価を受けました。この評価は研究科が長年にわたって培ってきた研究基盤や知的資産に立って、専門分野を牽引する国際的にも傑出した研究業績を多数創出したことが認知されたためと考えています。そのため、この評価を推進力として、次世代の農学、生命農学を担う国内外の優秀な研究者が結集できる研究拠点形成につなげることを指向して、さらに努力する必要があります。研究拠点化の方向は、平成22年度を期首とする、研究科の第2期中期目標の中にも位置づけられ、さらなる加速を目指

すことにしています。

もう一つ新しい教育研究プロジェクトが動き出しました。ご存知のように、平成19年度からグローバルCOEプログラム「システム生命科学の展開－生命機能の設計－」が先行していますが、今年度は環境学研究科との連携でグローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」が採択されました。このプログラムでは地球生命圏と人間活動の係りの中で生起する環境問題を現場で診断し、対策や予防などを考究・実践できる人材の育成を目指しています。そのため、大学院博士課程後期課程に統合環境学特別コースを設置し、両研究科の連携によりグローバルな思考力と地域での行動力を併せ持つ人材を育成します。本プログラムのホームページには生命農学研究科のホームページからも入ることができますので、詳細についてはそちらをご覧くださいと思います。

さらに、国際化に係る取り組みとして国際化拠点事業（グローバル30）がスタートしました。これは、現在、約12万人を数えるわが国の外国人留学生を2020年を目処に30万人に増やす、「留学生30万人計画」の一環として実施される事業であり、わが国の高等教育の国際競争力の強化と、留学生を惹きつける教育研究環境の提供により国際的に通用する人材の育成を目的とするものです。名古屋大学はそのような国際化拠点の一つに採択され、その中で農学部・生命農学研究科は理学部・理学研究科と連携して新設される「生物系コース」を担当します。この事業のポイントは、学部から大学院まで英語のみで学位が取得できるコースを設置することです。現在、平成23年度からの第1期学生の受け入れに向け準備を進めていますが、解決すべき課題も



多いのが現状です。教育研究の国際化は避けて通れないというねりであり、この事業を農学部・生命農学研究科の持ち味とうまくマッチングさせる工夫により、教育研究レベルの向上、学生の質保証に繋いでいかなければ

なりません。様々な視点からのアドバイスや情報をいただければ幸いです。最後になりますが、会員の皆様のますますのご活躍と農学部同窓会のご発展を祈念して、近況報告といたします。

名古屋大学農学部同窓会長あいさつ

板谷 精三 (林産1970年卒)

昨年より同窓会長を仰せつかりましたので、一言ご挨拶申し上げます。

私が団塊の世代の一人として昭和41年に名古屋大学に入学し、45年に農学部林産学科の2回生として卒業した当時は正に学園紛争の最中で、44年には豊田講堂や教養部が学生に封鎖されるという稀有な体験を致しました。高度成長期後半のこの時期には学園紛争に留まらず公害等の社会問題が顕在化した時期でもありました。今でも懐かしく思い出すのは、本山から名大までの歩道が赤土で舗装されていなかったため、雨の日は靴を見れば名大生が一目で判りました。先生方も人情味があって学部に入ってから担当教授には何かとお世話頂き深く感謝しております。あくまで個人的な見解ですが、農学部の学生は余り勉強には熱心ではありませんでしたが、どこか人間臭い処が特徴ではないかと考えています。

卒業後は大学の専攻とも関わりのある愛知県の工業用刃物メーカーに就職し、技術者として40年間勤務して来ました。一昨年から始まった世界的な経済危機は過去に経験したことがない大不況となり、団塊世代は引退するまで波乱の人生が運命付けられているように感じております。入社当時は全国的に住宅が不足しておりましたから、国内の刃物需要が大きく拡大しました。一方で合板に使用される南洋材丸太の輸出規制の影響等もあり顧客の海外進出に合わせて東南アジアでも刃物生産を開始することになりました。その後、欧米にも販路を広げることになり20年位は海外の仕事にも関わって参りました。名大農学部のOBの皆さんが東南

アジアを始め世界各国で活躍されていることを目の当たりにして頼もしく感じましたし、多くの方から助言や支援を得られたことを大変有難く感じたものです。同時に、日本の電機や自動車産業が広めた『Made in Japan』のイメージが広く定着しており、総ての日本製品は世界から最高品質の期待が寄せられていることも実感致しました。

昨年は日米で民主党が躍進し政権交代が実現しました。変革がキーワードになりましたが、今正にあらゆる産業で生残りのための大変革が進んでいます。住宅産業については昨年度の新設住宅着工数が78万戸余りと激減し、関係各社は大きな影響を受けました。今年も予断を許さない状況が続くと思われませんが、地球温暖化への対応が現実の課題となり国産材を利用した住宅造りが一躍脚光を浴びていることを喜ばしく感じています。農水省は森林・林業再生プランを策定し、日本の森林を育成して川下の木材産業の再興を支援する方針であると表明しています。農業、林業、水産業は化石燃料に大きく依存した工業化社会が顧みられる中、時流に沿った環境産業であり、同窓生各位の一層のご健闘を期待する次第です。

同窓生の皆様に推されるまま会長に就任致しましたが、同窓会を通じた縦と横の人の絆が拡大しますように会員の皆様のご協力をお願いしてご挨拶とさせていただきます。



平成22年度名古屋大学農学部同窓会 総会、講演会、懇親会のご案内

農学部同窓会総会、講演会、懇親会を下記の日程で開催します。みなさまお誘い合わせの上、ふるってご参加下さい。講演会、懇親会のみ参加も歓迎いたします。

○期 日：平成22年 6月 5日 (土) *名大祭期間中*

○総 会

時間：午後 2 時～ 3 時

場所：名古屋大学農学部 第 3 講義室

○講演会

愛知県産業技術研究所 食品工業技術センター

北本 則行 氏 第18回 (昭和59年 3月) 食品工業化学科卒、

第30回 (昭和61年 3月) 食品工業化学専攻博士課程前期修了

「名大農学部ブランドの日本酒開発に向けて」

時間：午後 3 時～午後 4 時

場所：名古屋大学農学部 第 3 講義室

○懇親会

時間：午後 4 時30分～ 6 時30分

場所：名古屋大学内シンポジオンレストラン ユニバーサル・クラブ

会費：1,000円

同窓会を開きませんか!?

農学部同窓会総会を機に、久しぶりに農学部に集まって同窓会を開催しませんか? 農学部同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。是非、同窓会事務局 (dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp) まで事前にご連絡下さい。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用頂くこともできます。

定年退職を迎えて

食品機能化学 大澤 俊彦

昭和53年 3月に名古屋大学へ赴任して以来、私の人生の半分以上を名古屋で過ごしました。私は、「東大闘争」の大荒れの時期に学部最終年度を迎えました。農学部でも3ヶ月にわたりストで、私は、「クラス連合」の立場で関与しただけですが、多くのものを学びました。そのために学部卒業は、昭和44年4月となり、履歴書を提出すると、いつも卒業時期の再確認が必要となりました。その後、過ごしたに大学院時代ではキクの植物ホルモン、博士取得後は、オーストラリア国立大学理学部科学科で3年間、ユーカリの植物ホルモンの生物有機化学的研究を行いました。リサーチフェローというポジションは、10年間契約の公務員のポジションで退職金や家族も含めた帰国の旅費も支給されるという、破格の扱いでした。そのお陰で、帰国の際

は16日間のクローズで、横浜まで家族と共に素晴らしい船旅を過ごすことができました。この3年間は、大自然のなかでゆっくりと基礎研究に集中でき、また、共同研究者のクロー教授と知り合え、家族ぐるみで交流が続いていますので、退職後、ぜひ、ゆっくりとオーストラリアを訪問したいと思っています。

名古屋では、並木満夫名誉教授、川岸舜朗名誉教授という、素晴らしい指導者に恵まれ、また、多くのスタッフ、共同研究者、職員の皆様、また、優秀な卒業生と共に、産学連携も活発に行うことができ、充実した研究生活でした。特に、印象深いのは、1984年に日本でスタートした「機能性食品」研究の流れ



が世界的な流れとなり、“科学的な根拠に基づいた”(Evidence-based)「機能性食品」の開発に大きな貢献ができたことです。特に、酸化ストレス制御の基盤的な研究アプローチは、われわれの研究室の最重要のテーマであり、研究成果が世界的レベルで評価されたことでした。特に、最近では、一滴の血液や唾液、尿中に存在する「酸化ストレスバイオマーカー」を利用した「抗体チップ」による未病診断、食品機能性評価の開発を進め、2009年には、大学発ベンチャー企業「(株)ヘルスケアシステムズ」社をスタートさせることができました。特に、“科学的な根拠に基づいた”(Evidence-based)「機能性食品」の開発は、今後も最

重要課題となってくるでしょう。

私は、今まで30年以上「食品機能化学」に関する基盤的な研究を進めてきましたが、4月以降は、愛知学院大学心身科学研究科で、運動と食による「健全なライフスタイル」の基礎となる臨床研究がスタートでき、境界領域の融合型研究の新展開ができるものと期待しています。このような、境界領域の研究の発展には、農学部で培われている基礎研究が重要な基盤研究となります。特に、産学連携も含めた他分野との交流は必須であり、そのような意味で同窓会が果たす役割は、今後も益々重要となるでしょう。同窓会のさらなる発展をお祈りいたします。

振り返ってみると

水圏動物学 宗宮 弘明

名古屋大と私のつきあいは、入学から就職までの16年間(学部、大学院、研究生と研究員)と、間をあげて最後の8年間(教員)の計24年となる。途中、私大(麻布大)に15年、三重大に7年在籍し、研究・教育・管理に従事してきた。麻布大では日本医大(解剖学教室)と共同研究を進めることが出来た。振り返ってみると、不思議なことに7-8年(かその倍数)の単位で移動していたことになる。

名古屋大に感謝しているのは、次の三つの点からである。

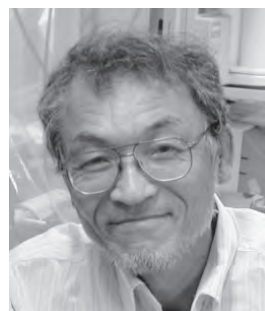
- 1) 柔道部での寝技精神：これはどんな強い相手でも粘って、粘って、粘り抜き、最悪でも引き分けに持っていく「寝技で粘る」柔道である。これは高校時代の「立ち技中心のあっさり」柔道を払拭し、その後の生き方に大きな影響を与えてくれた。また、柔道部は民主的で、練習は厳しいが、楽しい雰囲気であった。
- 2) 私の教養部時代には、入学式、大学祭、卒業式には、いつもたくさんの講演会が開かれていた。当時文学部哲学科の真下信一教授は講演の名手で、「哲学、概念、歴史」の意味を明快に説明し、私はそれにすっかり魅了されてしまった。この時代に生きる方向を学んだ。
- 3) 研究の面白さと英語論文の書き方。博士2年の時に、英語論文に取り組み、当時、育種学研究室に在籍されていた若杉昇博士に論文の作り方を1週間に

わたって、指導して頂いた。つまり、面白い結果を出し、筋道を立てて書き上げる。それは大変に魅力的な仕事であることを知った。

結局、名古屋大学で手に入れた、「財産」を元手に、麻布大、三重大を「回遊」し、最後に「母川」に回帰したということになる。

大学院からは、魚類生物学を研究したが、麻布大(獣医生理教室)では、ラットの自律神経系に励んだ。数年後に、魚病学総論の担当になり、また魚類研究に返ることが出来た。とにかく魚類生物学を続けていたので、三重大の魚類研究室に異動出来たと考えている。三重大では、練習船を自由に利用出来たので、再び「大好きな深海魚」を採集し、その研究を展開することが出来た。

名古屋大に移動し、2006年の暮れに偶然、「No more sea food by 2050」という論文を読み、その内容に正直驚いた。「海は広いし、深いし、まだ当分、魚類資源は安定的に確保できる」と、根拠なしに考えていたからだ。多数の関連論文を読んだ結果、カナダの資源学者が、即刻乱獲をやめ、持続可能な魚類資源管理を実施し、多くの海洋保護区の設定が必要と主張していることが判った。また、今のままだと、2050年にはほとんどの魚種が崩壊(これまでの最高の漁獲高の10%以下になる)すると危惧されている。気候変動や生物



多様性の急速な衰退を考えると、いまこそ、持続可能な新しい漁業・農業のあり方を探求する時代になった

と思う。進取の氣勢が著しい若い研究者にそれを期待したい。

動物に恋をして、そして人と動物の生き様に魅了された歲月

動物生産科学第1 織田 銃一

同窓会員の皆様に定年にあたっての思い出を語る時がきました。学生時代の4年、大学院時代の5年、そして1992年10月から出戻っての歳月が、農学部での生活でした。ひょろっとしたクスノキがグリーベルトの赤土に植えられていた時に入学し、学舎が建って2年目に教養部から農学部に進学しました。畜産学科の合格者は20名いたはずなのに、入学しなかったもの、転学科転学部したものの、落第したものの、がいて級友は9名になっていました。つまらない講義は聴いていてもしょうがないという理屈をつけて「科学論や方法論や恋愛論」にのめりこんでいましたが、もう少し教養や専門の講義に出席しておれば、教員の生きた哲学が学べたように思います。研究室に所属するとそれぞれの研究室で調達したニワトリ、玉子、魚を調理し、あるいは深夜トンちゃん屋に繰り出して腹を満たしていました。卒論と修士論文では「ニワトリ羽色の発生遺伝学的研究」ということで藤尾芳久先生から時間軸で見る事を学びました。博士課程では近藤恭司先生のもとで「ミュータント系実験動物の育種」をテーマに、多くの突然変異体の育成と解析に取り組み、40系統を分担飼育していました。育成する系統が多く、マウス小屋が原子核研究室の近くにあって、放射線がもれているのではないかと、あるいはゴッドハンドを持つ、と言われた事があります。同時に「野生動物の実験動物化—モグラは実験動物に出来るか」を課題に、スナクス（ジャコウネズミ）ははじめ野生動物を飼育することも始めました。1974年4月から環境医学研究所の助手になり、自分が育成したマウスやラットのミュータントを使った先天異常学に取り組み、また各種の薬剤や放射線を使って比較発生奇形の研究も行いました。農学部に出戻った後は山地畜産実験実習施設（設

楽フィールド）で、在来牛「口之島産野生化牛」の繁殖集団の確立や同じくシバヤギの系統育成に取り組みました。設楽が日本の中でも



ほど豊かな野生動物の住むところであり、野生動物の研究もテーマに入ってきました。研究室として標本を残す事業も始めました。牛や山羊はもちろん、カモシカやニホンジカ、その他ロードキルの死体や動物園の動物達も加わり、有数のコレクションが成立しました。これらの標本は100年後200年後も残っていく研究資源となるものです。飼育した動物種および系統数はかなりの数になり、常時2000匹の動物を飼育し、命を奪った数も野生個体を含めると2000匹をはるかに越えていました。動物を分与した研究室も海外も含めて200以上になるでしょう。研究室に加わってくれた学生、大学院生のパッションに圧倒され、研究テーマとして両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類の様々な課題が持ち込まれ、おかげでずいぶん勉強させていただきました。研究室の論文は数だけでみれば、英文205編、和文320編を上回りそうだ、とのこと。教員一人の研究室で、それだけ情報発信できたことは学生、大学院生、共同研究者のおかげであり、支援して下さった職員の方々によるものです。ただただ感謝するばかりです。同窓会といえば、農学部の17年間で、博士学位の主査で16名、修士学位の主査で30名、卒論指導で36名、他に学部研究生4名、大学院研究生3名を送り出す事が出来たことです。卒業生に会員になるように言うくらいでしたが、今後はもう少し同窓会の行事に参加できることでしょう。

39年間ありがとうございました

生命共生学 高倍鉄子



私は1971年4月に名古屋大学農学部附属生化学制御研究施設で教務職員として働かせて頂くことになりました。その前は、理学部の大学院生として、低分子化合物のX線結晶構造解析の研究をしておりました。理学部から農学部に移った時に、初めて生物を対象とする学問の大変さに気づきました。生物は毎日しっかり見ていないと大切なサンプルを得ることすらできません。私は植物や光合成微生物を対象にさせて頂きましたが、生き物を見る目というものが、農学部出身の方に比べ劣っていました。何とか生化学というものが、身に付いたかなと自分で感じるまでに3年はかかりました。その間上司の赤沢堯先生や同僚の皆さまに大層ご迷惑をおかけしたことをお詫びしなければなりません。赤沢先生から頂いたテーマは「光合成CO₂固定酵素(Rubisco)のサブユニット構造の機能解析」というものでした。サンプルはハウレンソウ、藍藻、光合成細菌と進化的に面白いものを広く使わせていただきました。Rubiscoは世界中で一番多いタンパク質ですが、光合成細菌からRubiscoを精製するために、20Lのガラス容器を約10個使い、細菌を育てました。これを重い遠心ローターで集菌し、4℃の低温室内でもくもくと実験を行いました。最初にこの実験をした時に、ものすごく疲れたことを覚えています。今思い起こしても、すごい力仕事をしていたと、これまでの自分に何か賞を与えるなら、この時の自分に「努力賞」を与えたいと思います。私は研究以外にも事務的仕事や技官の仕事も多く与えて頂き、多様な仕事を経験できたことは他の職種の方の気持ちも良く分かる人間になれたと喜んでおります。

私が農学部に来た当時は、農学部は実に「男性社会」でした。教務職員のみまで定年となる可能性が非常に高かったと思いますが、その後助手を経て、初代留学生専門講師になりました。留学生の皆さんから明るいパワーを頂き、心からお礼を申し上げたいと思います。講師になった時から、私は独立したテーマで研究をさせて頂きました。その頃、熱帯林を伐採して、農業が続いていると塩が土壌に浮き出るといった現象が東南アジアで話題になり、「植物の塩ストレス耐性機構の解明」をテーマとしました。Rubiscoの研究をしていたときに、塩分濃度の高い死海の藍藻を使っていたこともあり、テーマを設定しやすかったこともあります。子供の時赤痢にかかり、抗生物質がない時代で食塩注射で助かったという経緯もあり、よほど塩に縁があったのねと兄弟に笑われました。さらに助教授、教授と、名古屋大学農学部にお世話になろうとは、今でも信じられない名誉なことです。研究もなんとか自分のカラーを出すことができました。これは一重に皆さま方の暖かい励ましと支えがあったことです。優秀な大学院生にも恵まれました。何とか研究も一段落させ、無事定年を迎えられることは、幸運以外のなものでもありません。

定年後は、食と農業を生活者の立場から考えてみます。日本の農業の明るい未来のために、同窓会を通じて、今後も努力を惜しまないつもりです。39年間、本当にありがとうございました。

開発途上国の農学・農業問題に取り組んで

農学国際教育協力研究センター 松本 哲男



農学部と同窓会の皆さんの中には、「何故、松本が教授に?」と思った方もおいでではないでしょうか。平成11年12月6日に農学国際教育協力研究センター設立記念式の受付をしておりましたら、恩師であられる山本幸男先生がお見えになり、「設立おめでとう。ところでなぜ君がここにいるの?」と尋ねられました。「10月16日付けで農国センターの教授として赴任しました。」とお答えすると、しばし絶句されました。私はそれまで多国籍企業ダウ・ケミカルの農薬事業部門アジア・太平洋研究開発部長兼任グローバル研究開発アドバイザーをしていました。会社と私事の都合で赴任が半年遅れまして、当時の執行部の先生方には大変なご迷惑をおかけしまして、失礼致しました。

大学院以来21年ぶりの名古屋大学は、懐かしさとともに新たな意欲を駆り立ててくれました。学生時代ベトナム戦争反対の運動に加わりましたが、それ以上何もできなかったことの責任を感じておりましたので、赴任後はベトナム戦争で荒廃したインドシナ半島諸国の農学系大学の教育強化に取り組みました。特にこの戦争が原因で起きたポルポト政権による知識人の大量虐殺の影響が深刻なカンボジアを重点に、唯一の農業大学である王立農業大学のカリキュラムを、旧ソビエト型から単位・選択制を基礎としたグローバル型に改革し、大学院修士課程、博士課程の設立に協力してきました。その時の弟子が昨年設立されたカンボジア初の総合大学、バタンバン大学の学長に抜擢され、こ

れでカンボジアの教育も期待できるかなとうれしい限りです。弟子の出世を喜ぶ歳になったのです。2006年からはカンボジア農村でお酒造りを中心に農産物加工産業振興にも取り組み、昨年12月に市販のめどをつけることができ、私の卒業に間に合うことができました。

農国センターは、山下興亜先生が、「農学部は最先端の科学と世界の農学・農業に貢献すべき」理念のもとに、文部科学省に強く働きかけ出来たものと伺っております。当時の生命農学研究科は、前者は得意でも後者を担う人材は残念ながら不足していたから、私のようなものでも務まったと言わざるを得ません。それでも設立後10年の間に、農国センターの「確かな存在感」を名古屋大学だけでなく、国内外の農学系大学、開発関係機関に持って頂けることに少しは貢献したかなと手前味噌ですが思っております。

最近海外に出て何でも見てやろうという若者が少なくなりました。私は「若者よ、ケータイを捨て、世界に出よう!」と呼びかけたい。設立以来の最後の教員として、農国センターが生命農学研究科と協力して全国的な農学支援ネットワークを構築、活用し、現場の課題を解決できる人材育成を今後も強化・発展させていくことを心から期待しております。

卒業生の言葉

4年間を振り返って

生物環境科学科 生物材料物理学研究分野 平出 秀人



大学に入学してからの4年間を振り返ると、アルバイト、部活動、飲み会、研究室でのイベントなどこれまでの生活ではなかったことを多く経験しました。しかしながら、僕の大学生活はほとんど学業と部活動の陸上との2色に染まっていたように思います。陸上に関しては、1～3年生のころは講義や実験実習の数が多く、さらには教職も取っていたため、合同練習にあまり参加できない状況でした。他の部員より遅れて練習を始め、終わるのは9時、そこから帰って、寝て…、その翌日の1限は本当につらいものでした。陸上の記録が伸びだしたのは時間的に余裕ができた3年生の後期から。とりわけ研究室に配属された4年生からは、時間的な拘束がない分、部活動に最も集中できた1年間となりました。朝9時ごろには研究室に到着して一通り作業をした後、気分転換に研究室からジョギングに出かけたり、実験の待ち時間が合同練習の時間と重なるようにして実験を組んで練習に参加したり、研究に陸上に毎日が充実していました。

学部を卒業した後は大学院へと進学します。大学まで進学させてくれた両親、研究室の先生や同輩、一緒に練習した陸上部員など、これまで僕を支えていただいた全ての方々にこの場を借りて感謝申し上げます。とりわけ、僕のがまを何度も聞いていただいた研究室の先輩には、本当にお世話になりました。重ねて感謝申し上げます。そして、来年度からは研究計画も実験手法も自分自身で考えていかなければなりません。そのため、今のように部活に参加しながら研究を進めていくことは難しくなるかもしれません。それでも、相変わらず陸上を続けるつもりです。面白いと思えるのなら研究も陸上も両立できる、と安易な考えですが今はそう思えます。来年度も充実した毎日が送れるよう、頑張りたいと思います。

卒業を迎えて

資源生物科学科資源植物環境学研究分野 間合 絵里



私の大学生活は初めての事が多く、戸惑うこともありましたが、とても充実した4年間でした。

私はこれまで電車通学をしたことがなく、初めて定期券を手にしたときの感動は今でも覚えています。片道2時間の道のりは決して楽ではありませんでしたが、学校帰りに友達と買い物をしたこと、車窓から見える四季の変化、朝夕の通勤ラッシュなど、通学中にもたくさんの思い出ができました。1年生の頃は授業数が多く、弁当を作ったり、駅まで送ってくれたり、朝早く夜遅い生活に合わせてくれた母には感謝しています。3年生から一人暮らしを始めて、身の回りのことをすべて自分で行うようになると、その大変さが身にしみました。

学校生活では、私たちの学年から3学科に改変されたこともあり、クォーター制などの新たな試みが多く行われました。講義も実習も手探りななかで、熱心に指導して下さる先生方、気の合う仲間達とともに、この資源生物科学科としての第一歩を踏み出せたことを嬉しく思っています。

3年生の農場実習では、生まれて初めて田んぼに入り、田植えを経験しました。慣れない手つきで作業をしていると、農業経験のある友達が見せてくれました。農場での夏野菜栽培や果樹の剪定などは、私にとってどれも貴重な体験となりました。

4年生になると研究室に配属され、気さくで優しい先生方、先輩方に囲まれて楽しい研究生活を送ることができました。最初は何となくしかわからなかった卒論のテーマも、論文を調べたり、セミナーで発表するにつれて、だんだん理解できるようになりました。卒業後は大学院に進学し、さらに深く研究を進める予定です。私は植物の環境ストレス応答に関する研究を行いましたが、ここでの研究が生命科学分野の発展と環境問題に役立てたら、と思っています。

最後に、楽しかった大学生活を語るのに不可欠な友人、親身に指導して下さった先生方、先輩方、そしていつも温かく見守り、支えてくれた家族に、心から

感謝しています。

本当にありがとうございました。

卒業するにあたって

応用生命科学科分子生物工学研究分野 吉野 健太



農学部に入學して4年、あっという間に過ぎてしまいました。今では、当然のように農学部での生活を送っていますが、入学当時のことを考えてみると、新しい環境で、新しい友人、大学の講義、全てが新鮮で、不安だらけでした。でも、農学部やサークルの友人と日々過ごしていくうちに、いつのまにかそういった気持ちは消えていました。あれから4年が経ち、勉強面はもちろんですが、その他の生活面においても、名古屋大学で過ごした時間1つ1つが私にとってかけがえのない大切な宝物となりました。

学部での親しい友人もでき、大学生活にも慣れてきた頃、体を動かすことが好きだったこともあり、テニスサークルに入りました。学部生だけでなく、大学院生、卒業したOB・OGの先輩まで、多くの人と親交を深めることができました。2年生の時には運営スタッフもやらせていただき、週2回の練習、イベントの企画、運営などを行い、大変貴重な経験となりました。この経験を社会に出てからも生かしたいと思うとともに、学部同様、サークルで出会った友人達を大切にしていきたいです。

4年生になって、研究室に配属されてからは、それまでとは少し違う生活になりました。自分の研究テーマを持ち、計画を立て、実験を行う上で、操作や理解に戸惑うこともありましたが、先生や先輩方が手厚く指導してくださり、安心して研究に取り組むことができました。同期には、元気なメンバーが揃い、実験では協力し合い、休憩時にはたわいもない話で盛り上がるなど、いつも明るい雰囲気で研究に臨める環境でした。適切な指導をしてくださった先生方、いつも優しく、面白く、頼りになる先輩方や、横一列に並んで実験した支えあえる同期に恵まれた研究室生活でした。

少し前に入学したばかりのように感じられ、卒業するという実感が湧きませんが、この4年間は今までの人生の中で、様々なことを経験できた、最も充実した日々だったと思います。また、改めて人との繋がりの大切さを感じられ、周囲の人々への感謝の気持ちも強くなりました。私は4月から社会人となりますが、名

古屋大学での経験を糧として、これからの生活をより一層実りあるものにしたいと思います。最後に、私をこれまで支えてくれた家族、友人、先輩、先生やその他お世話になった方々に深く感謝致します。4年間ありがとうございました。

2年間を振り返って

生命農学研究科 応用分子生命科学専攻 動物機能制御学研究分野
池上 啓介



私は大学院から現在の研究室に移りました。それまでは農学部の別の研究室に所属していたのですが、どうしてもやりたい研究があったことと現在の指導教官である吉村崇教授に惹かれたことが研究室を変えるきっかけになりました。

移ってからの研究はありがたいことに私の希望していたことをやらせていただけました。先生の指導は大変的確でかつ厳しいものでした。実験の組み立てから、論理的考察、そして科学者としての生き方など色々ご指導していただきました。その指導は辛くもありましたが、私という少しマゾな人間をよく見ており、その性格を生かす指導を先生はしてくれていたのだと後になって気付きました。科学者としてだけではなく指導者としても尊敬するようになりました。先生には心より感謝いたします。

また、進学当初は研究室に馴染むために自分から行事を企画したことで、いち早く研究室に溶け込むことができました。研究室の雰囲気はメリハリのあるピリッとした雰囲気があり、一方で和気あいあいとしたところもありました。夜遅くまで実験がある日もあったり、先生や先輩、同期の仲間と議論してアドバイスをもらったりして大変有意義な研究生生活を過ごさせていただきました。一方で、「研究室旅行」や「院試お疲れ様会」、「お花見会」、「クリスマス会」など年内に数えきれないほどの行事やイベントがあり、その度ごとに楽しい思い出を作ることができました。

修了を迎えたのち、私はドクターコースに進学する予定です。これまでに身につけたことを精一杯発揮し、かつさらに勉強してサイエンスの前進に貢献したいと思います。

最後に、多くの助言を頂いた吉村先生と副指導教員の先生方や研究室の仲間々に厚く御礼申し上げます。また、あっという間でしたが充実した2年間を支えてくれた友人や家族に感謝したいと思います。

平成21年度名古屋大学農学部学術交流基金助成事業の採択者一覧

(農学部学術交流基金助成は農学部創立50周年記念事業の一環として行われています。)

○「学術研究の助成」

・水口 智江可 (助教)

課題等：チョウ目昆虫における遺伝子機能解析のモデル実験系構築

○「海外派遣の助成」

・Marcos B. Valdez, Jr. (応用遺伝・生理学講座・D3)

課題等：国際繁殖生物学会2009年次会への参加と研究発表(研究発表課題：Differential Development of Sex-related Characters of the GSP and PNP/DO Chickens after Left-ovariectomy)

人事異動 (平成21年1月～12月まで)

						生命農学研究科・農学部	
日付	内容	職名	氏名	備考			
H21.2.28	退職	助教	川崎 通夫	弘前大学農学生命科学部准教授へ			
H21.3.1	昇格	准教授	矢野 勝也	助教から			
H21.3.31	定年退職	教授	竹谷 裕之				
"	"	"	服部 一三				
"	"	"	並河 鷹夫				
"	"	"	柴田 叡弐				
H21.4.1	兼務	教育研究評議員	坂神 洋次	21.4.1～23.3.31			
"	"	副研究科長	坂神 洋次	21.4.1～23.3.31			
"	"	センター長	柳沼 利信	附属フィールド科学教育研究センター		21.4.1～23.3.31	
"	兼務終了	演習林長	太田 岳史	附属演習林			
"	"	施設長	海老原史樹文	附属山地畜産実験実習施設			
"	兼務	専攻長	畑 信吾	生物圏資源学専攻		22.3.31まで	
"	"	"	田中 利治	生物機構・機能科学専攻		"	
"	"	"	牧 正敏	応用分子生命科学専攻		"	
"	"	"	森 仁志	生命技術科学専攻		"	
"	"	学科長	前多敬一郎	農学部資源生物科学科		22.3.31まで	
"	"	"	小鹿 一	農学部応用生命科学科		"	
"	採用	教授	山本 進一	理事から			
"	"	"	松本 省吾	岐阜大学教育学部教授から			
"	"	"	松田 洋一	北海道大学大学院理学研究院教授から			
"	"	"	黒田 俊一	大阪大学産業科学研究所准教授から			
"	"	准教授	山崎真理子	岐阜工業高等専門学校助教から			
"	"	"	中崎 敦夫	東京理科大学薬学部助教から			
"	"	助教	渡邊 健史				
"	"	"	北浦 靖之	理化学研究所バイオリソースセンターから			
"	配置換	教授	柘植 尚志	附属農場から附属フィールド科学教育研究センターへ			
"	"	"	織田 銃一	研究科から附属フィールド科学教育研究センターへ			
"	"	准教授	肘井 直樹	附属演習林から附属フィールド科学教育研究センターへ			
"	"	"	土井 一行	附属農場から附属フィールド科学教育研究センターへ			
"	"	"	大蔵 聡	附属農場から附属フィールド科学教育研究センターへ			
"	兼務	研究科長補佐	前島 正義	22.3.31まで			
"	"	"	肘井 直樹	"			
H21.5.1	配置換	教授	松田 洋一	研究科から附属鳥類バイオサイエンス研究センターへ			
H21.12.1	昇格	教授	肘井 直樹	准教授から			
生物機能開発利用研究センター							
H21.3.31	定年退職	教授	若松 佑子				
"	"	准教授	依田 欣哉				
H21.4.1	兼務	センター長	松田 幹	21.4.1～23.3.31			
"	採用	教授	日比 正彦	理化学研究所発生・再生科学総合研究センターから			
H21.11.1	採用	准教授	清水 貴史	理化学研究所発生・再生科学総合研究センターから			
農学国際教育協力研究センター							
H21.4.1	兼務	センター長	山内 章	21.4.1～23.3.31			

農学部同窓会ホームページ案内

祝賀会、講演会、懇親会の模様、農学部研究室の変遷などに関する情報は農学部同窓会ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>) に掲載中です。是非ご覧ください。

平成20年度 事業報告

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成20年6月7日、名古屋大学農学部において総会を行った。総会終了後、小西 千晶氏((株)東芝、社会システム社、水・環境システム事業部)による講演「電機メーカーが取り組むバイオマス事業 ～異分野の技術を融合し、新しい市場に挑戦～」を開催した。講演会終了後、名古屋大学内“ユニバーサル・クラブ”にて懇親会を開催し、親睦を深めた。
- 2) 卒業祝賀会の開催
平成21年3月25日に農学部談話室にて卒業祝賀会を開催した。樽酒を飲み交わしながら盛会のうちに終了した。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成21年3月に発行した。
- 4) 農学部同窓会50周年記念事業
～卒業50周年記念祝賀会の開催～
平成21年6月7日、名古屋大学農学部大会議室において第4回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を農学部談話室と共同で開催した。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に同窓会ホームページの充実をはかった。
- 6) 同窓会名簿の管理
全学同窓会の名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努めた。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し運営に協力した。

平成21年度 事業計画案

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成21年6月6日、名古屋大学農学部において総会を行う。
総会終了後、伊藤 高明氏(住友化学株式会社 農業化学部門主幹)による講演「マラリア対策用オリセットネットについて」を開催する。
講演会終了後、名古屋大学内“花の木”にて懇親会を開催する。
- 2) 卒業祝賀会の開催
平成22年3月25日(木)に農学部談話室にて卒業・修了祝賀会を開催する。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成22年3月発行予定。
- 4) 卒業50周年記念祝賀会の開催
第6回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を開催予定。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に同窓会ホームページの充実をはかる。
- 6) 同窓会名簿の発行および管理
全学同窓会の名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努める。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し運営に協力する。

名古屋大学同窓会 平成20年度決算

【収入の部】

費 目	金 額 (円)	細 目	金 額 (円)	備 考
会 費 等	2,403,000	永 久 会 費	1,580,000	79名
		一 般 会 費	465,000	93名
		寄 付 金	358,000	77名
卒業50周年祝賀会・ 談話会会費	78,000			39名
総会懇親会費	39,000			39名
そ の 他	142			利子
前年度繰越金	24,903,040			
合 計	27,423,182			

【支出の部】

費目	金額(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,165,672	会報発行発送 手数料	1,163,992 1,680	印刷・発送
総会	219,723	総会支給交通費 懇親会費 講演料 講演者旅費	40,500 121,890 33,333 24,000	3名
卒業50周年祝賀会	72,360			
卒業祝賀会	190,976	祝賀会費 振込手数料	190,556 420	
役員報酬	132,000			11名
支部支援金	170,000	平成19年度分 平成20年度分	60,000 110,000	関東支部 関東支部、関西支部
名簿管理	32,255	データ投入料 振込手数料	31,835 420	
アルバイト代	250,000			事務補助
郵便振替手数料	27,250			
その他諸費用	22,380	理事会交通費 課税納付 その他事務経費	6,000 6,000 10,380	講演料、講演者旅費
次年度繰越金	27,423,182			
合計	27,423,182			

名古屋大学同窓会 平成21年度予算

【収入の部】

費目	金額(円)	細目	金額(円)	備考
会費等	2,710,000	永年会費 一般会費 寄付金 広告掲載費	2,000,000 500,000 150,000 60,000	100名 100名 30名 4件
卒業50周年祝賀会・ 談話会会費	50,000			25名
総会懇親会費	50,000			50名
その他	200			利子等
前年度繰越金	25,140,566			
合計	27,950,766			

【支出の部】

費目	金額(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,300,000			印刷・発送
総会	273,333	講演料 総会支給交通費 懇親会 通信・印刷費	33,333 80,000 150,000 10,000	
卒業50周年祝賀会	200,000			
卒業祝賀会	200,000			
寄付	200,000			名古屋大学基金への寄付
役員報酬	132,000			11名
支部支援金	90,000	関東支部 関西支部	60,000 30,000	平成21年度分 平成21年度分
名簿管理	50,000			
アルバイト代	250,000			事務補助
郵便振替手数料	50,000			
その他諸費用	45,000	旅費 その他事務経費	10,000 35,000	
余剰金	27,950,766			
合計	27,950,766			

平成21年度 役員名簿

名誉会長	服部 重昭 (研究科長)	会 計	梶村 恒 (森林保護学)
会 長	板谷 精三 (学外)		小林 美里 (動物栄養情報学)
副会長	海老原史樹文 (動物行動統御学)	名 簿	佐藤ちひろ (動物細胞機能)
関東支部	朱宮 正剛 (学外)	ホームページ	兒島 孝明 (分子生物工学)
関西支部	加藤 壽郎 (学外)	会 報	吉田 正人 (生物材料物理学)
総 務	柴田 貴広 (食品機能化学)	事 務	宮田 久代 (生殖科学)
	谷口 光隆 (資源植物環境学)		(敬称略)



関東支部だより

関東支部長 朱宮 正剛 (畜1964年卒)

関東支部は、名古屋大学農学部同窓会員 (旧教官・教員を含む) で且つ関東地区に在住する者をもって構成される。対象地区は、東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城を原則とし、該当の名簿登録会員数は千余名である。

これまで関東支部では数年おきに支部総会を開催し、平成21年 2月21日 (土) に支部総会と講演会を神田の学士会館で開催した。総会では、規約 (第6条) により支部長が再任された。支部長の任期は次の総会が開かれる迄の期間とされている。幹事として、犬飼初男 (畜1970年卒)、牧田雄介 (林産1971年卒)、春日井治 (農1972年卒)、高橋英一 (林1972年卒)、裏地達哉 (食1977年卒)、石川靖文 (食D1981年卒)、伊豫田敏宏 (畜1984年卒)、小西千晶 (林産1990年卒)、森光康次郎 (食D1992年卒)、木村知文 (応2002年卒)、黒川晶範 (応分M2004年卒)、相談役として、仙石三郎 (農化1955年卒)、彌富耿彦 (農1962年卒)、鈴木國夫 (農化M1968年卒) の方々にご承諾をいただいた。

講演会では、農学部同窓会会長・研究科長の服部重昭氏 (昭45林) に「名古屋大学と同窓会の近況」、森永乳業 (株) 食品基盤研究所長の岩附慧二氏 (昭47農化M) に「牛乳のおいしさ評価」についてご講演いただいた。



講演後、懇親会を開催し、参加者40名が講師を中心に、旧交を温めながら、ノーベル賞に湧く母校への思いを語り、新たな仕事への取り組みとネットワーク作りの必要性を感じた。

なお、次回の関東支部総会は、平成23年2月を予定しております。仕事の上でも人生においても同窓会は新しい出会いの場となります。若い人たちの参加を切に望みたい。

メールアドレスの登録、更新は下記にお願いします。
連絡先：朱宮正剛 (名大農同窓会関東支部 支部長)
E-mail : shumiya@sepia.ocn.ne.jp
TEL & FAX : 03-3811-9759
住所：〒112-0002 東京都文京区小石川3-22-1

平成22年 1月14日 (木) 学士会館において名古屋大学全学同窓会関東支部新年交流会と「医学教育の曙からノーベル賞までー名古屋大学創立70周年記念ー」の特別展示会等が開催された。企画展示には約320名、新年交流会には270名 (内農学部同窓生は16名) が参加した。交流会には昨年 4月に就任された濱口道成総長、ノーベル賞の小林誠特別教授等を迎え大盛會でした。平成21年卒の新社会人をはじめ、若き卒業生たちが大先輩とお話し、交流、ご指導賜り、感激しておりました。今後の交流促進のために全学同窓生のネットワーク整備が進められています。農学部同窓生の皆様のご協力を宜しくお願い致します。

名古屋大学農学部同窓会関西支部便り

平成21年度の名古屋大学農学部同窓会関西支部総会を、11月14日に開催いたしました。今年の総会は、龍谷大学で教鞭をとっておられる宮浦富保先生 (昭61林D) のご好意により、龍谷大学瀬田キャンパスで行うことができました。瀬田キャンパスはJR 瀬田駅からバスで10分程度のところにあり、森に囲まれた静かな、美しいたづまいを見せておりました。キャンパスに隣接して「龍谷の森」と名づけられた約38ヘクタールの山林が里山として保全されております。折角の機会

ですから、「龍谷の森」の散策も企画いたしましたので、朝11時から午後5時30分までと、長丁場の同窓会となりました。今年は、昨年同様20名の方にご参加頂きましたが、初参加の方5名を含め、お互い、名古屋大学農学部をベースとした仲間ですから、すぐに打ち解け和気あいあいと和やかな同窓会となりました。

総会議事を終えた後、早速、隣接する里山の散策に出発いたしました。ご説明によりますと、このあたりは、昔、琵琶湖の湖底であったそうで、山道を歩くと丸くなった石が名残を見せてくれました。山林はかつては農地として使われていたところもあったようですが、今はコナラや植林されたヒノキの林となっております。里山のほぼ中央に25mの森林観察タワーがあり、鉄パイプの骨格でできたタワーを恐る恐る頂上まで登って行きました。頂上からは山林全貌を見渡すことができ、久しぶりに童心に戻って爽快な気分を味わいました。

約1時間半の散策から戻り、軽食ののち、野村章さん(昭45農D)から、ご自身のご経験を踏まえ、医薬品の品質管理や品質保証に関連するお話をしていただきました。医薬品の安全性や効果を確保するうえで、その裏づけとなる科学データの信頼確保が大変重要であることや、関連する法規制、また、国際的な動きについてお教えいただきました。信頼性確保を声高く唱え、法規制をしても、最後は関係者の倫理観が基本となる、とのお話を聞いてなるほど、どこの世界も倫理観がやはり基礎となると納得いたしました。

講演会のあとは、いよいよアルコールも入った懇親会です。乾杯して一息入れた後、参加された方お一人おひとりに近況のご紹介をいただきました。現役で活躍されている方や、リタイア後の人生を楽しく有意義に過ごされている方のお話を聞いている間に時間もすぐに過ぎてしまい、5時半のお開きとなりました。みなさん、来年の再会を約束して帰途に着きました。来年度の総会は11月13日(土)と決まりました。万障お繰り合わせの上、是非ご参加されますようお願い申し上げます。後ほど、ご案内を差し上げますが、事務局の手違い等により、お手元に届かない場合には、下記メールアドレスにお問い合わせいただきますと、ご連絡させていただきます。



(連絡先)

住所：〒669-1103 兵庫県西宮市生瀬東町37-23

寺前 朋浩

メールアドレス：tomotera@qc5.so-net.ne.jp

(文責：加藤寿郎；昭45農M)

名大遠州会だより

遠州会農学部幹事 米屋武文(食D1980年満了)

名大遠州会は、静岡県西部(大井川以西)に居住または勤務する名古屋大学、大学院若しくはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。

同窓会を毎年、総会を隔年で開催しています。平成21年は、第14回同窓会を6月13日(土)18時に浜松オークラアクティホテルに85名の会員が集い、名古屋から濱口名大新総長、伊藤全学同窓会代表幹事、吉田秘書課長の御三方の来賓をお迎えして開催しました。

乾会長の挨拶に続き、来賓のスピーチをいただきました。4月から総長に就任された濱口総長は、20分にかけて名古屋大学の特徴、今後のビジョンについて熱く語られました。人材育成として、東海地方の土着的文化を心に抱きながら国際舞台で十分勝負出来るような体験と英語力を在学中に身に付けさせることと、大学のグローバル化の2点を挙げられました。また、伊藤代表幹事からは、名古屋大学カードの加入状況と加入依頼がありました。

来賓スピーチに引き続いて、名大創立70周年を記念し、遠州会繰越金の中から寄付金(20万円)を贈呈することとし、大久保名誉会長から濱口総長に目録をお渡ししました。

その後、浜松市消防局の方に「消防救急と医療機関との連携」と題して、浜松における救急活動の実態と今後の計画、消防ヘリコプター導入計画についての小講演がありました。

懇親会は、10分間の休憩を取って隣の宴会場に移動し、三谷副会長の司会で始まりました。卒業年代の近いグループで指定された9卓の円テーブルを囲み、庄田副会長の乾杯の発声で酒宴がスタート。各テーブルには空席も用意し、テーブルを移動し世代と学部を越



大久保名誉会長による寄付金贈呈

- 科教授が事業のプロジェクト・コーディネーターを務める 2009.7.17読売
 新美輝幸生命農学研究科助教らのグループは「生物農薬」となることが期待される羽のないテントウムシを作り出すことに成功 2009.7.22中日(朝刊)他3社
 「ヒメボタルサミット in 愛知」開催：8日大場裕一生命農学研究科助教が講演 2009.8.5中日(朝刊)
 旬な人：ミツバチの集団失踪を調査する門脇辰彦生命農学研究科准教授が紹介される 2009.9.6読売
 名大サロンの主役：門脇辰彦生命農学研究科准教授が「ミツバチ減少の謎」と題して講演 2009.9.8中日(朝刊)
 特報：新美輝幸生命農学研究科助教のグループが作製に成功した「羽のないテントウムシ」がクローズアップされる 武田穰産学官連携推進本部連携推進部長は「企業に売り込んで生物農薬としての事業化も考えている」と話す 2009.10.8中日(朝刊)
 シデコブシの生態と遺伝を研究する戸丸信弘生命農学研究科教授が紹介される 2009.10.18中日(朝刊)
 牛乳市民講座「ミルクですこやかな毎日を」開催：31日松田幹生命農学研究科教授が「ミルクの科学と歴史」の題で基調講演を行う 2009.10.20中日(朝刊)
 本学・国連大学・財団法人国連大学協力会共催シンポジウム 2009.11.4読売
 「資源としての生物多様性を考えるー COP10にむけて」開催：26日井村秀文環境学研究科教授、渡邊幹彦環境学研究科特任教授、戸丸信弘生命農学研究科教授、武田穰産学官連携推進本部教授が講演 2009.11.27毎日(朝刊)
 名古屋市立大学「COP10と環境まちづくりシンポジウム」開催：19日宗宮弘明生命農学研究科教授が講演 2009.12.10中日(朝刊)
 生命農学研究科長・農学部長に服部重昭生命農学研究科教授が、エコトピア研究所長に高井治工学研究科教授が選出される 2009.12.25中日(朝刊)読売
 織田銃一生命農学研究科教授は名古屋城の外堀という「陸の孤島」で大型化したモグラを『名古屋城モグラ』をシンボルとして保全すれば COP10でアピールできる」と語る 2009.12.31朝日(朝刊)

同窓会寄付者一覧

本年度、農学部同総会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。ありがとうございました。

(敬称略)

浅野 峯男	旭 正	雨木 若慶	池田 稚佳
石河 正則	石原 詳宣	伊藤 雅人	岩井(寺本) 浩
岩瀬 保夫	岩間 綾子	鶴高 重三	大岩 仁志
大元 英司	奥村 佳史	片岡 浩一郎	加藤 真一
加納 周雄	河合 義隆	川村 梯式	川村 義己
木庭 尚美	栗本 重夫	小林 良一	佐々 武史
志賀 将雄	嶋本 聖子	菅原 知宏	鈴木 太七
高培 知子	竹内 久男	竹村 富男	館本 篤志
館本 勲武	田中 良信	谷川 満	谷田 貴弘
築山 孝弘	寺澤 眞	内藤 千裕	中川 俊次
永見 俊之	成瀬 和也	長谷川 靖彦	長谷川 利行
浜田 健嗣	原 睦美	曳地(平井) 利枝	平島 昭和
平林 良一	藤原(木村) 啓	古田 隆則	松崎 敦志
松田 克文	松本(寺島) 正	松本(金田) 和子	水野 薫
三矢 和志	村田 聡子	森田 雅也	山根 恒夫
山村 淳一	横山 昭	吉田 昭	渡辺 広次

全学同窓会について

名古屋大学全学同窓会は、卒業生だけでなく名古屋大学関係者すべてを構成員とする同窓会で、大学と社会の交流の核となり、国内にとどまらず国際的にも貢献することを目的としています。全学同窓会は、部局同窓会と連携しつつ卒業生、学生、教職員の交流の場を提供し、情報発信や人的交流、学術研究、教育及び学生の支援など全学的見地から様々な活動を行っています。昨年度は、ホームカミングデイ共催、ニュースレターの発行、海外支部の創設、大学支援事業、名古屋大学基金募金活動などを行ってきましたが、このうちホームカミングデイと海外支部の創設についてご紹介いたします。

1. 第5回ホームカミングデイ

ホームカミングデイは、本学の卒業生や元教職員の方々が集い、在校生の保護者などの方々に名古屋大学の教育・研究の理念などを理解して頂くために毎年開催されています。昨年は、第5回目のホームカミングデイとなりましたが、特にこの年は創立70周年目にあたるため、ホームカミングデイに先立つ1週間前に記念式典・祝賀会、記念フォーラムが、約1000名の参加者を集めて豊田講堂で盛大に開催されました。記念式典では、ノーベル賞受賞者の益川先生をはじめ、本学を卒業され、多方面で活躍されている方々をパネリストに迎えて記念フォーラムが開催されました。また、名古屋大学基金にご寄付頂いた方々（20口以上）の芳名を銘板に刻んで豊田講堂内に設置することになっていますが、その除幕式が執り行なわれました。ホームカミングデイ当日は、創立70周年を記念し、名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサートや学術講演会、市民公開講座など多彩な企画が催されました。全学同窓会は、昼食券を配布するなどの支援を行いました。農学部としては、

生物多様性を身近に知り地域から地球環境を考えるために、キャンパス内を散策して樹木などを観察する「名大キャンパス雑木林の生物多様性を観察しよう！」を企画しました。本学部の山本進一教授（元副総長、森林植物生態学研究分野）をはじめ大学院生の協力のもと好評のうちに終了しました。また、保護者などを対象とした企画行事として、農学部入学後の進路、就職、学生生活などについての相談会や学生実験室や図書室などの見学ツアーを行いました。

2. 海外支部の創設

名古屋大学には、現在1300名ほどの留学生在籍していますが、今後10年間で、3000名にまで拡大する計画で、そのために講義を全て英語で行う教育を準備しつつあります。全学同窓会では、今後ますます増加する本学留学生との交流をはかるために、海外支部の創設を推進しています。昨年度は、モンゴル支部が設立されました。モンゴル出身の卒業生は70数名おり、以前から設立の動きがありましたが、濱口総長がモンゴル名古屋大学日本法教育センター設立3周年記念行事と名古屋大学フィールドリサーチセンター開所式に出席するためにウランバートルを訪問するのを機に設立されました。設立総会では、濱口総長、代表幹事の挨拶の後、同窓会のモンゴル支部旗と支部認定証が授与され、祝賀会を開催して終了しました。現在、海外支部はモンゴル支部を含めて8支部（韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル）あり、台湾でも支部設立が準備されています。

なお、名古屋大学全学同窓会についての情報は、下記ホームページをご覧ください。

<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

事務局だより

平成21年8月に農学部同窓会会員録を発行することができました。皆様のご理解、ご協力を頂き感謝申し上げます。また、転居および転動の際は、同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）までご連絡下さい。

今後も会員の皆様からのご質問・ご要望にお答えしてまいりたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

会員のみなさんからの寄稿**林産学科第二回生同期会だより**

樋口晴一（昭47年林産 M）

林産学科第二回生は、昭和45年に卒業後、岐阜市の長良川河畔の温泉旅館で同期会を初めて開いてから暫く中断することがあったもののほぼ毎年開催してきました。数年前、学生時代にお世話になった感謝の気持ちを込めて恩師の先生方をご招待してはどうかとの提案が誰からともなく出され、講座を代表する先生ご夫妻に順次出席していただいて毎年開催しています。

一昨年は、同期生の澤木さんが一部上場企業の社長に就任し、佐治さん、毛利さんを合わせて3名もの同期生の社長が誕生するという、同窓生としても誠に誇らしく慶ぶべき年となり、林学科の同期生で前林野庁長官の加藤さんにも特別参加してもらったの祝賀の同期会となりました。寺島先生からは、米国林野庁長官の就任挨拶の「我々は、常に変わらなければならない。我々にとって、唯一変わらないこと、それは、『我々は、常に変わらなければならない』ということである。」を引用して、米国の強さの源泉にふれての激励とお祝いのお言葉をいただきました。

昨年は、木方先生ご夫妻に出席いただき、先生に「熱

帯の木材」についてご講演いただきました。講演後、同期生各自の近況報告と各々の同期生に対する先生からの人物短評があり、毎回のことながら会場は笑いの渦に包まれました。また、先生の奥様から、先生の意外な一面を知る貴重なお話をお聞きできるのもこの会の楽しみの一つです。「お開き」の後に名大元応援団長の深田さんのエールでご夫妻をお送りするのが恒例となっています。この記事を読まれて我々も同期会を開催しようという方が現れ、そして同窓会の発展に繋がれば幸いです。



農学部同窓会事務局では、広告の募集をしています。本会報の発行部数は、現在約7,900部で、本学農学部関係者に配布されています。会社の広告、同窓会の通知などにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。

理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具
主要取扱メーカー

久保田製作所	トミー精工
東京理化	タイテック
マリソル	日本エイド
佐久間製作所	岩城硝子
三洋メディカ	アトバンテック
三立科学	アト



株式会社 みずほ理化

〒468-0066 名古屋市天白区元八事1丁目33番地
TEL 052-831-8800
FAX 052-834-4117

理科研はバイオ研究に欠かすことのできない
試薬・機器の販売を通じ
人類の幸せと豊かな社会の実現を願っています

理科研株式会社

<http://www.rikaken.co.jp>

- 本社 名古屋市守山区元郷二丁目107番地
〒463-8528 TEL 052-798-6151(代) FAX 052-798-6157
- 岡崎営業所 TEL 0564-57-1751(代) FAX 0564-57-1757
- 福井営業所 TEL 0776-52-1651(代) FAX 0776-52-1653
- 岐阜営業所 TEL 058-240-0721(代) FAX 058-240-1082
- 津営業所 TEL 059-224-6661(代) FAX 059-224-6671
- 四日市営業所 TEL 059-326-0231(代) FAX 059-326-3577
- 静岡営業所 TEL 054-256-3751(代) FAX 054-256-3755

研究設備・分析機器・光学機器・分析器具

主要特約代理店

オリンパス	三洋電機
ヤマト科学	GEヘルスケア・ジャパン
トミー精工	ライフテクノロジーズジャパン
旭硝子	アズワン

株式会社 木下理化

〒466-0035
名古屋市昭和区松風町1丁目32番地の3
TEL (052) 859-2132
FAX (052) 859-2136

永坂カメラ

名古屋市瑞穂区八勝通2丁目1-1

TEL 052-832-6539

コミュニケーションの進化に対応する



URL <http://www.kwix.co.jp/>

印刷を核に情報産業を担う企業として、
新時代のコミュニケーションの輪を
拡げています。

- 本社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL (0566) 24-5511 / FAX (0566) 26-0200
- 名古屋本部 〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20
TEL (052) 871-9190 / FAX (052) 889-1410